

プロフェッショナルに

学ぶ

吉原由香里

国際囲碁連盟理事 女流囲碁棋士

吉原由香里



治療家の毎日にはまさに患者さまとの真剣勝負。今回のプロフェッショナルは女流囲碁棋士として活躍する吉原由香里さんです。勝負の世界に生きるプロの心構え、自らを高める極意など、プロの治療家にとっても有益なお話をお聞きしました。

吉原由香里(旧姓 梅沢) Yoshihara Yukari 囲碁棋士五段

1973年東京都生まれ。13歳から囲碁を始め、85年全日本女流アマチュア選手権6位。87年加藤正夫九段に入門。92年慶応義塾大学環境情報学部入学。大学3年生の95年に女流棋士特別採用試験(プロ試験)合格。96年NHK教育テレビ「囲碁の時間」の司会兼聞き手役レギュラーとして登場。以来、テレビ、雑誌などのメディアで活躍。01年に「ヒカル」監修によりジャーナリストクラブ賞を受賞。05年国際囲碁連盟理事に就任。07年女流棋聖就任、以後2年連続防衛。

自分に、自分の仕事にプライドを持つこと。それがプロフェッショナルである!

真剣勝負をかさねた数だけプロは強くなれるんです。



プロの世界は結果がすべて。頼れるのは自分だけ。

私たちプロの囲碁棋士は勝負に勝つことが仕事なんです。まずこの世界に入るのもプロ試験のトーナメント戦に勝ち残れないとダメ。私も何回も何回もチャレンジしました。年に1人が2人という本当に狭き門で、暗れてプロ試験に合格すれば、そこにはまた真剣勝負の日々が待っています。プロのリーグ戦で勝ち進めば、段位も収入も上がるし、頂上のタイトル戦にもチャレンジできる。勝つか、負けるか。結果がすべてのプロ囲碁棋士の世界は、とても分かりやすい世界といえますね。

自分の限界は自分で破っていくもの。それがプロの流儀。

プロの世界に入った当初は、私にとってタイトル戦なんて夢の出来事のように思っていました。とにかく目の前の一局に全力投球するだけ。それでも勝つときもあれば、負けたときもある。負けたときはなぜ負けたのかを、とことん研究しました。自分だけの確認ではなく、師匠や先輩たちにもアドバイスをもらいました。すると自分が考えもしなかった打ち方や新たな発想が見えてくるのです。負けた碁から多くのものを学びました。こうして目の前の一局をコツコツと勝つことを目指しました。すると、だんだんと対戦相手も強くなり、さらに勝ちたいという思いが強くなっていったのです。気がついていたら、夢の出来事だと思っていたタイトル戦にもチャレンジでき、とうとう2007年に女流棋聖のタイトルをとることができました。

と、そして常に自分の限界を上げていくことが大切だと思います。

自分をコントロールする力。慢心とプライドの功罪。

あるレベルのプロになった方にとって落とし穴になるのは慢心だと思えます。私も段位が下の人の対局で、ちょっとした油断から手痛い目に遭うことがあります。この人には絶対に負けられないというプレッシャーばかりが先に立ち、勝負どころの勘が鈍ってしまうのです。そんなときに、思わぬミスをしてしまう。やはりこれも慢心の結果といえるでしょう。軽く勝るとか、絶対に負けられないとか、へんな気負いが平常心を失わせて、冷静な判断ができなくなってしまうわけです。

それですら反省する必要がある。ミスは反省することばかりですが、ミスにとらわれてばかりいると今度はマイナス思考に陥ってしまいます。そんなときはちょっと勝負の世界から離れることも重要ですね。私の場合は、趣味のパンづくりに熱中するか、他のことで頭をリフレッシュさせるように心がけています。

それともう一つ大事なことは自分にプライドを持つこと。こんな自分では恥ずかしいという思いが、落ち込む心を踏みとどまらせ、新たなやる気を生みきっかけになります。きっとプロの仕事でなさっている方は、みなさんそうではないでしょうか。プライドはいろんな困難を乗り越える大きな原動力だと私は思っています。

プロフェッショナルの教え

教え 01 真剣勝負をたくさんすべし!

頼れるものは自分しかないという状況で、「真剣勝負」といえる仕事をとにかくたくさんすること。それが実力を身につける最良の方法である。プロフェッショナルに近道なし!

教え 02 自分の限界を破るべし!

プロとして自分を高めていくには、自分の限界を常に超えていくことが肝心。今日より明日、今月より来月と、少しずつ自分の限界バーを上げていく努力を続けよう!

教え 03 プロのプライドを持つべし!

自分が選んだ道、自分が全うしたい仕事であることを常に自覚しよう。その道のプロとしてふさわしい自分であるかどうか。プライドが、くじけない、逃げない心を鍛えてくれる!